琉游舎

アトリエ琉游舎だより 243号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2026年11月日4日発行

真木の屋に時雨の音の変はるかな
紅葉や深く散り積もるらむ

藤原実房

●明け方、雨の音に目が覚されることがあります。そして秋も深まると雨の朝は明るくなるのが遅いので、ついつい二度寝をしてしまい、朝のラジオ体操の時間を寝過ごしてしまうことがあります。天気予報だと今朝は晴れのはずなのにと思ってよく耳を澄ましてみると、風の音と、落葉の舞い落ちる音だったと言うこともあります。時雨と落葉と風の音の饗宴です。

●上記の歌は、そんな晩秋の音を詠んだ和歌です。「真木の屋」は和歌では杉や檜などの立派な木で作られた冬のわび住まいを表す言葉のようです。わび住まいの家屋にあたる時雨の音が秋の深まりとともに変わってきました。真木の屋や庭に直接あたっていた時雨の音が、紅葉の落葉が積もった庭や屋根となり、そこにあたる時雨の音も変わったようです。静かな山里のわび住まいで聞く音に、秋の深まりと、冬の到来を予感させてくれます。

●季節の変化は気候の変化だけでなく、音の変化でもあります。春、明け方目覚まし時計のように啼いていた鳥の声。夏、日中の暑さを倍増させるように響き渡っていた蝉の声。秋、夜なのに賑やかだった虫の声。それらの声もいつのまにか聞こえなくなって、この晩秋の時雨と落葉の落ちる音がなくなると、冬は無音の音の世界に入っていきます。一年を自然の音の変化とともに過ごせることはこの上もない贅沢なことかも知れません。たまに聞こえるヘリコプターや飛行機の音、風の関係で遠く聞こえる貨物列車の音も一興です。そういえばいつもなら何度も聞いた猪が箱罠で暴れる音を今年は聞いていません。どうしたのでしょう。

●年毎に聞こえてくる音は異なっているようにも感じますが、聞こえない音は聞こうとせずに耳を素通りしているだけかも知れません。昔、線路沿いのアパートに住んでいたことがあります。始発電車の音が聞こえていたのは最初の三日くらい、その後は電車の通過音は聞こえなくなりました。正しくは聞こうとしなかったのでしょう。ところで今、私たちの声を聞かない聞こうとしない為政者たちには、晩秋の時雨や落葉の音は聞こえているのでしょうか。

写経会11/29（日）13時半　読書会11/17・12/1（火）13時半

狂言綺語…攻守一如

AI知能が急激なスピードで人間社会を破壊し始めたように感じるのは、思いすごしでしょうか。45年前に仕事を始めた当時は、会社の地下に電子計算室があって、機器が24時間動いていた記憶がありますが、それが何に使われ、自分とどういう関係があるかを知ろうともしないし、知らなくても何の支障もありませんでした。そして、気がついたらいつの間にか一人一台のパソコンが配備されていたのです。最初、中年以上の社員は操作に慣れるためにとゲームをするか、ネットサーフィンをするかの役にしか立っていないのでしたが、様々な手続きや連絡がPC上で行なわれ、書類の作成、送信、検索、承認、なども全てPC上で行なわれるようになると、会議とプレゼンテーション以外はPC上で仕事が全て済んでしまうようになったのです（最近では会議もPC上で行ないますが）。その頃からハッカーが暗躍し始めて、それを防ぐためのウイルス防御のビジネスを行なうクライアントとの取引も始まりました。便利で機能的になればなるほど、その機能を侵略して利益を得ようとする者たちが現われ、また、それを防ぐ方法が次々と編み出されるというイタチごっこの始まりです。その果てが、現在のAIを使ったサイバー攻撃です。PCもスマホも使わない生活は、今更不可能です。様々な私の個人情報も間違いなくいくつかの攻撃で、奪われているでしょう。しかし、個人が対処することは不可能です。被害を防ぐ方法があるのかの見当もつきません。あるとしたらスマホもパソコンも使わない生活をするしかないでしょう。でもそれは間違いなく社会からドロップアウトすると言う選択です。デジタル社会からの離脱は、即社会からの脱落だとしたら、サイバー攻撃で社会が破壊されるか、デジタルネットワークを根絶して社会全体がデジタル技術に頼らない世界に作り替えるしか方法はないでしょう。

私たちの社会の歴史は「攻撃」と「防御」の歴史ともいえます。「攻撃は最大の防御」や「専守防衛」と言う言葉があります。この言葉を手がかりに、攻撃と防御を二項対立と考えるのではなく、表裏一体、不二、一如の関係にあると考えれば、この二者を「善と悪」「正と誤」「真と偽」と観るのではない存在認識があるのではないか、と言う可能性を夢想したくなります。攻めることは守ることであり、守ることは攻めることであるとなれば、攻めることも守ることも無化されてしまうのではないかと言うことです。攻めも守りも「空」であり「無」であるということです。「無」を争うことは意味のないことだと言うことに気づけば、攻撃も防御も習合できるとはずだと考えたいのです。それがどんな方法かはまだ見当がつきませんが、、、

仏教伝来当初、日本は土着精神そのもののカミと外来神のホトケとは対立していました。外敵（ホトケ）の侵略に対してカミは防衛の体勢を取ったのでしょうが、為政者間のカミとホトケの戦いは、ホトケに国家鎮護の役割が与えられることで決着し、政治的には日本のカミは異国のホトケの軍門に降ることになりました。国の信仰として採用されなかったカミは、政教一致、宗教対立の原則からは日本民族から抹殺されるはずです。しかし敗者であるカミは排除も根絶もされませんでした。ホトケは土着の神を排除するのではなく、共存する道を選びました。神仏習合、カミとホトケの出会い、精神（カミ）と智慧（ホトケ）の同化です。世界宗教が拡がっていくときには多かれ少なかれ、原始宗教（土着の宗教）の要素を取り入れて拡がるものですが、神仏習合の場合はそれを顕在化し、体系化しているところに特徴があるのではと考えます。神社（カミ）に寺院（ホトケ）が祀られている神宮寺は神仏分離令まで存在しました。日本人は防御（カミ）と攻撃（ホトケ）の戦いを、降伏や根絶で終結させるのではなく、習合する共存共栄の道を選んだのです。

三十番神の信仰が平安時代から今に至るまで存在し続けています。日本国中に祀る30の神々が1ヵ月30日の間，毎日順番に国家と人々を守るという信仰です。日本の神々が、仏教、特に法華経や国家を守ると考える、神仏習合の思想から生まれた信仰です。天台宗の開祖最澄が比叡山に祀ったのが最初とされ、鎌倉時代には盛んに信仰されるようになりました。中世以降は特に日蓮宗や法華神道で重視されており、現在でも日蓮宗の寺では三十番神信仰がみられる寺院があります。この信仰の理論が本地垂迹説です。本地は本体である仏や菩薩のこと、垂迹は仏が仮の姿を取って現われた神のこと、権現は仏が「権（かり）に現われる」ということで、神の別名です。例えば八幡神を八幡大権現や八幡大菩薩と呼ぶことなどです。本地垂迹説はかつて土着信仰を防衛する立場だったカミが、侵略信仰であったホトケを守護する立場として、現在まで続く神仏習合の理論的支柱です。この歴史的経緯や臣従関係、神仏分離令による影響など詳しく語る余裕はここではありませんが、本質は日本民族の精神（カミ）の源泉は、どのような舶来の智慧（進歩的理論や技術）を持ってしても、占領し壊滅させることはできないと、私たちが生来、理解していたと言うことと思われます。それによってカミやホトケの原理的意味合いが薄れたとも言えます。しかし原理によって争いが起こるよりも、平和的に共存する道をカミとホトケは選択し、共に歩んだ方がよいと考えた日本の精神と智慧の軌跡がここにあります。「選択」は全てを包摂する「摂取」でもあります。ホトケはカミを摂取し、カミはホトケを摂取したのです。因みに日蓮宗における三十番神は第一日目から順に、熱田、諏訪、広田、気比、気多、鹿島、北野、江文、貴船、伊勢、八幡、賀茂（以下略）など日本中の神が３０柱あてられています。

三十番神に伊勢の神があります。天照大神です。明治維新の神仏分離令までは、天照大神は大日如来が垂迹した仏の守護神の一柱と考えられていました。そのため維新以降、政府の国家神道政策により徹底的に排除されました。しかし結局、破壊も禁止もされずに現在も日蓮宗の曼荼羅ご本尊に記されています。どんなに攻撃されても生き残っているという事実は、人が必要とする存在はどんな攻撃にも耐え、存続可能であるということ。この考えを受容できるなら、攻守一如（習合）は実現できるはずです。そして争いなき社会も。